

愛なし×デレなし×監禁調教 クズ×カントボーイ

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 媚薬
- 玩具・拘束放置
- ザー食
- 土下座
- 快樂墮ち(身体のみ)

有紀のくせに自分から離れていくのが許せないと、あいつはただそう言っていた。

「駄犬はお仕置きしないとね、有紀」

愛でも何でもなく、都合のいい玩具だったはずの有紀がこいつに反抗したのが気に入らないだけ。あまりにもむなしく、救われない。

今に至っても、康太にとって有紀は人間ですらないのだ。

そんな人を人とも思わない康太は笑顔のまま、ベッドから降りて立ち上がり、いずこかへと去っていく。

当然、有紀の身体を戒め苛むテープや玩具はそのままだ。首も首輪のせいでやたらと重たい。楽になりたい。大学に戻りたい。

こいつのいないところならどこでもいい。どこか遠くに
.....o

「っあっあアゝ う、ん、っぐう.....っは、はひっ♡ん、
くううゝ あゝ♡」

こちゅこちゅ、ぐりゅうつ.....ヴヴヴヴヴ、ぐにっ♡

そう思っても、すぐに膣内を暴れまわるバイブにまともな思考を奪われる。

芋虫みたいに身体を揺らし、奥やGスポットへの刺激から逃れようとしても、結局無駄なあがきで。

喘ぎながらわめいていると、再び康太が戻ってきた。快楽由来の生理的な涙で滲む視界でも、康太がなにか手に持っていることはわかる。

そして、こういう時、たいてい有紀にとって望まぬ方向に物事は転がっていく。

康太は有紀の首根っこを掴み、ベッドから引きずり下ろす。柔らかなマットレスどころかベッドの角、カーペットの床、様々なところに身体のアチコチをぶつける羽目になるわけ。

痛い。痛いはずだが、それすら気持ちいい.....。有紀の口からはうめきとも喘ぎとも取れない、聞くに堪えない艶を含んだ声が零れ落ちた。

「あぐ！？♡んあ、っひ.....つくそ、何しやがる.....ッ！」

「お仕置きなんだからベッドで優しくなんてするわけがないだろう？」

「ひ、っふ……っう、う、んぎっ……ア、あゝ♡バイブ、動くから、やめっ……♡はら、っが♡」

康太がからから笑いながら、有紀の腹を軽く蹴る。

軽い痛みと衝撃、そしてバイブが奥を大きく強く抉ってきて、有紀は涙目になる。もうやだ、外してほしい。位置がかわったおかげでクリも潰され、快感が下半身から全身に波のように広がっていく。

しかし、康太は有紀の言葉を聞き入れる気など毛頭なく、手に持った細長い漆黒の棒を近づけてきた。

「っぎあ！？♡」

棒の先っぽがはだけたシャツの隙間に差し込まれ、わき腹に軽く触れる。

その瞬間、ぱちんっ！となにかが弾ける音が鼓膜を揺らし、なんなら脳みそまでもを震わせた。一瞬遅れて感じるのは痛みと快感。

今まで経験したことのないタイプの痛みに有紀は目を見開き、困惑した表情を浮かべる。

いったい何が起こった？あの黒い棒はなんだ？

その様子を滑稽に思ったのか、康太は幼い子供のように、無邪気にからからと笑った。

「電流だよ、SM用のグッズを買ってきたんだ。っていうか、痛いだけじゃなくて気持ちいいんだ？ならほら、もっと遊んであげる♡」

「んぐう！？♡あぎ、っあ、やめ、っお、おゝ！？♡♡♡」

とん、とん……ぱちちっ♡

笑いながら、わき腹、肩、太もも……試すように、いろいろな場所に康太は棒の先で触れていく。そのたびに電流が全身に流れ、有紀は悶絶してしまう。

全身が不自然に強張り、パイプを強く締め上げる。テープで固定されてさえいなければ、きっとベッドから引きずり降ろされた時に抜け出ただろうに。

「やだ、やだやだやだっ♡びりびり、きらいっいゝくるし、つらいっいゝ、やめ、ってゝ♡♡♡」

「やーだ♡有紀が悪いんだよ？僕に逆らうから、さっ！」

「んぎい！？あがっ♡っおご♡あががっ.....いや、っあゝ♡♡♡」

びり、ばちち、ばちんっ！

痛い。気持ちいい。イタイ、キモチイイ.....。

電流自体はSMグッズということもあって、危険ではないレベルのささやかなもの。それでも痛いものは痛いし、その上で痛みを快感と感じる己が嫌で仕方ない。

そのまましばらく、康太が気のすむまで有紀は電流を流され続け、弄ばれた。

その途中でぷしゃぷしゃと潮を噴き、カーペットに染みを作ってしまう。それを口実にもたまたま電流を流されての繰り返しだ。

「ッ……♡ッッッ……お、あゝ、あええゝ……♡♡♡」

「イッてるでしょ、僕にはわかるよ？僕の前では隠し事なんてできないんだよ、有紀。愚図でのろまで、男なのにまんこがついててさ！」

「〜〜〜っおほ♡んぎ、っあぐ、うる、さあ……くそ、ったれっ！んぎゅうう！？♡」

「はぁ！？どの口がそんなことほざいてるわけ！？

ばち、ばちばちっ、びく、びくんっ……♡

汗と涙、涎、潮……ありとあらゆる体液でぐしょぐしょになり、痙攣するようにびくつく有紀を見下ろしながら、康太はどうでもよさそうに吐き捨て、つま先でわき腹を蹴って仰向けに転がしてくる。

痛いのか気持ちいいのかもわからない。口から飛び出る反抗的な言葉は、無意識のうちに吐いたものでしかない。本人の思考はすでに快感と痛みでまともに回っていないのだ。

最終的に、自分の身体が自分の物ではないかのようにまともに動かず、びくびくと陸の上に打ち上げられた魚みたいになっていた。

「は一あ、これだけやっても反省一つしないなんて。本当にどうしようもない駄目犬だね。飽きちゃった」

吐き捨てた康太は棒をベッドの上に雑に放り捨てる。それに気づき、有紀の心の中に安堵が広がっていった。

(おわ、った……?)

拘束を外してバイズを取って寝かせてほしい。

逃げたい以前に疲れ果てていて、早くも朦朧とする意識を手放しかけていると、康太がすぐ傍にしゃがみこんでくる。

そしてポケットからピルケースを取り出し、錠剤を一つ取り出した。

「有紀、君は一生僕の玩具でいなきゃダメなんだ。どうせ将来だって大したことの無い仕事について、何の面白みもない人生を送るんだろうし。それなら僕のペットでいたほうがずっと有意義だよ。逆らおうなんて思う資格はないんだよ」

ぐったり倒れ伏して目を瞑る有紀の前髪を掴み、無理やり顔を上げさせられ、苦痛に顔が歪む。その顔を見て康太はうっそりと、それはそれは嬉しそうに微笑んだ。

優しい、王子様のような笑顔。しかし、そのはちみつ色の瞳はどろりと蕩けていて、快感と苦痛でたっぷり痛めつけられ、這いつくばることしかできない有紀を見下し、興奮しているのが見てとれる。

そんな、一見して誰もが騙されて好いてしまうだろう笑顔のまま、康太は先ほど取り出した錠剤を有紀の喉奥に押し込んだ。

「むぐう！？っおえ、なに、っあが」

急に指を喉奥まで突っ込まれ、朦朧としていた意識が鮮明になる。

目を見開き逃れようと頭を動かそうとするが、前髪が掴まれているせいでそれもかなわない。ぷちぷちと数本髪が抜け、僅かな痛みを与えてくる。

「飲み込め」

冷たく鋭い命令だった。しかし、当然有紀からしてみれば飲み込みたくなんてないわけで。

目をぎゅっと瞑り、嫌だと抵抗の意思を示す。しかし、そんな反抗は無駄であり、康太は口から指を引き抜き、代わりに鼻をぎゅっと強い力でつまんできた。

「早く」

「っご、お……んうぐッ……つかふ、ん、ン ……こく、んっ」

息ができない。飲み込むまでそのままと言外に脅してくる康太に、有紀は結局屈するしかなかった。

だって、死にたくない。死んだら終わりだ。まだまだこの先やりたいことはたくさんある。

有紀の喉仏が動いたのを確認し、康太はぱっと掴んでいた鼻と髪を手放した。拘束され、力尽きる寸前の有紀はそのままカーペットに倒れ込み、嘔吐く羽目になる。

「っげほ、ごほっ……かひゅっ……おえ、えゝ！？」

どくん。吐き気を堪え、カーペットの上でもがいていると、突然心臓が勝手に大きく跳ねた。

まるで初恋をしたときのような感覚を無理やり引き出され、有紀は目を見開き、背中をくの字に曲げる。

(あつい)

汗がぶわりと髪の生え際や背中に滲む。全身が熱くてたまらなくなり、心臓が早鐘を打ち始める。

この感覚に、有紀は覚えがあった。

「おま、っえ……えゝ、また、アレをのませっ……♡」

責める言葉すら甘さが滲む。

有紀がさっき飲まされたのは間違いなく媚薬で、即効性のある強力なものだ。なぜわかるかって、今までに何度も飲まされたことがあるからだ。

そのたびに記憶が飛ぶほどの強烈な快感に犯されることになり、身も世もなく目の前の憎い男に縋りつき、喉が潰れるまで喘ぐことになった。

嫌だ。さぁっと青ざめるが、それも一瞬。即効性だけあって、あっという間に媚薬は全身に回り、電流のせいで存在感を失っていたバイブが再び主張し始めた。

「んあ♡っひ……っい、やだ、っうあ♡あっあっ……っおほ♡きゅうにっゝ、はげ、しぐっ！？♡♡♡」

ヴヴヴヴヴ、ぐりゅっ♡ぐに、ブブブブブ……ッ！！

♡♡♡

違う。さっきまでの動きじゃない。明らかに膣内を抉るバイブの動きが大胆に、激しくなっている。

顔を上げ、康太を見る。さっきまで有紀の前髪をわしづかみにしていた手をポケットに手を突っ込んでいた。

「あ、気づいた？」

有紀の悲鳴に康太はわざとらしく、ゆったりと焦らすようにポケットから手を出した。

そこにあったのはバイブの遠隔スイッチで、それを最大まで上げやがったのだ。

ぐねぐねとおまんこの中で不規則に動き回るバイブに、有紀は狂ったように泣き叫ぶ。まずい。何度か経験があるが、このパターンは最悪だ。

「やめ、もっお♡つくあ、あっああ♡♡らめ、らめらめらめっ……♡ばいぶ、やだあ♡……もうやだっ、やすま、せろよおっ！きもちいの、いらなっあ♡」

とりあえず訴えてみる。どうせ却下されることはわかりきっているが、我慢できない。全身をもぞもぞ動かし、ふうふうと獣のような荒い息をつきながら、有紀は必死に喚き散らした。

カーペットの柔らかな毛が素肌に当たるたび、電流とは正反対の柔らかく甘美な快感が発生する。身体を動かさなければ少しはましになるだろうに、身体の震えを止めることがどうしてもできなかった。

なんなら膣だって、きゅっきゅと処女のようにバイブをキック締め上げ自爆している。

そんな有紀を見下ろしつつ、康太は手でスイッチを弄びながら、口を開いた。

「じゃあ謝ってよ。僕に逆らってごめんなさい、もう二度と逆らいません、ペットとして一生飼ってくださいって」

愛など一切感じない、不機嫌で詰まらなさそうな表情。

とにかく命令を聞かせ、従順な玩具になればいい。昔はともかく、今はそんな康太が嫌いで嫌いで仕方ない。

憎い。俺の人生をめちゃくちゃにしゃがって。底なしの怒りが湧いてくるけれど、湧いてすぐに全て快感でぬりつぶされていく。

それでも、僅かに残った蜘蛛の糸のような細さの理性と感情が、有紀を奮い立たせる。……立たせてしまった。

「いやだっあゝ……♡ぜんぶ、っう、ツァ、、おまえのっおゝ、おあ♡思うとおりになると、っおゝ、あえ♡おもう、なよっ……」

「ほんっと強情。学校にいたときは僕がいなきゃなんにもできない〜って顔してたのに。最悪」

「〜〜んほっおゝォゝ！？♡♡♡」

下腹部を軽く蹴られ、それだけで絶頂する。

有紀が一番感じるのはおまんこだ。理由は康太がぶっといおちんぽで何度も貫いたから。

逆に言えば、他の個所はほとんど手つかずだ。愛撫なんてものを、康太は有紀に施さない。

なぜって、康太の快樂になんにも結びつかないからだ。康太が有紀に求めるのは都合のいいオナホ穴だけ。愛とか情とか、そんなものは不必要だった。

なんなら人間とすら見ていなかった。

汚い濁った男の喘ぎ声は聞くに堪えない。女性器がついていたって、結局男だ。聞きたくない声が口から飛び出しても止められないのが悔しくて悔しくて仕方ない。

だが、その悔しさや怒りすら、快感にすぐ変わってしまう。

「萎えた。いいよ、スイッチは切ってあげるよ、ほら」

終わらない快感に鳴く有紀に対し、意外にも康太は興味を失ったようで、素直にスイッチを切ってくれる。

さらに愛液でしとどに濡れたテープをべりべりと容赦なく剥がし、バイブを引き抜いた。

「うぎゅっ！？あ、やめ、もっと優しくはが、っせ……
っえ、いだ、っうあ♡」

「うるさいなあ。わざわざとってあげたのに」

最後まで抗うようにねっとりと絡みつく媚肉の感触がわかったのか、康太がにんまりと口角を上げた。

「淫乱」

有紀を蔑む言葉のレパトリーには事欠かないらしい。

だが、引き抜かれた時にまたイッた有紀には、言葉の意味を理解して怒るだけの力が残っていなかった。

媚薬が全身に回り、深い絶頂から降りられない。ありとあらゆる体液でべたべたになりながら、有紀は熱の移ったカーペットに黒髪と頬をこすりつけた。

「それじゃあ今日はおしまい。あ、拘束具は明日の朝とってあげるから。それまで反省してなよ」

「……は？」

「は？って。だって取ってほしかったんでしょ？ああ、ベッドに寝かせてほしいってこと？カーペットの染みをとるのも面倒くさいし.....シーツを洗ったほうがマシかぁ。いいよ」

どろっどろに濡れたバイブを回収した康太はそのまま踵を返し、部屋から出ていこうとする。

それに対し、思わず有紀は戸惑いの声を上げた。

だって、いつもなら、媚薬が使われた後は朝まで康太に手ひどく犯されるのだ。媚薬が抜けてもなお、絶頂に次ぐ絶頂に見舞われ、身も世もなく泣きじゃくる。それが通例だ。

そもそも媚薬が体の中に残っている。いや、残っているどころか打たれたばかりだ。このまま放置されたらイくにいけないまま、快感に蹂躪されるのを刺激もなく耐えなければならぬ。

ぐちゃぐちゃに凌辱されるのと放置で耐えること、どちらがましかと言われたら.....経験上多分まだ、前者なのだ。

しかし、康太は有紀の絶望した顔を見てかわいらしく小首をかしげ、そのまま有紀の首根っこを掴んでベッドの上に放り投げる。

柔らかくどっしりとした上等なマットレスが有紀の体重を受けて深く沈み、その衝撃でまた軽く甘イキする。

媚薬さえなければ休めると喜んでいたのに。これでは休むどころか消耗する一方だ。

「っあん、っぐ♡お、あゝっふ、ふーっ♡♡♡まで、ちが.....！」

言葉を紡ぐのにも息を吸って吐いて四苦八苦しつつ、有紀は必死に康太を引き留めようとする。

けれど、康太は振り返りすらせず、まっすぐ部屋を出て行って鍵をかけてしまった。

「あ.....」

さぁっと青ざめるものの、もうなにもかもすべてが手遅れだ。

きっと初めから今日の康太はこれを企んでいた。放置して、全身を熱に犯させながら朝まで耐えさせ、有紀の反抗心をへし折るつもりなのだ。

すでに今日は一日中、康太が朝出かけてから帰ってくるまでずっと、拘束されてバイブを入れられて放置されていたのに。おかわりなんて聞いていない。

「っうあ、く、そっ……きらいだ、おまえ、なんてっえゝ
……♡♡♡」

クリトリスも膣内も、孕めない出来損ないの子宮も、どこもかしこもじんじんうずうず、直接快感を与えてくれる刺激を欲していた。

今すぐ康太のぶっといちんぽが欲しくてたまらない。そんな欲望が脳裏をよぎり、有紀はぎゅっと目を瞑ってマットレスに己の顔を埋めた。

(我慢、できる、俺ならできる、我慢、我慢、我慢……
ッッッ♡♡♡)

それからいったい、どれだけの時間が過ぎたのだろう。

有紀の時間感覚は一瞬で消えてなくなる。そもそも監禁生活が始まってから昼夜もなにもかもわからないのだけれど。

2026年6月27日発行

著者 トクシュセイヘキオニチク堂

この本は一次創作作品です。

実際の作品や人物、団体とは関係ありません。

無断転載、ウェブサイトへのアップロードを固く禁じます。